

# 売春物語

HOLY KNIGHT

PROSTITUTION STORY

# 聖騎士

如月トモエ

挿絵◆伊藤隆生



試し読み版

18  
未済

二次元ドリームノベルズ

プロローグ	夢幻の中で	006
第一章	聖騎士	012
第二章	労働者	044
第三章	娼婦	095
第四章	闘士。……？	134
第五章	性処理肉便器	169
第六章	ヒトイヌ	205
エピローグ	夢幻に堕ちて	237

## 登場人物紹介

Characters



### ユカ・ユーリカ

共和国で名を馳せるユーリカ財団の当主で資本家。茶目っ気のある雰囲気でエリナに接するも、性格はかなり狡猾。自身の経営する娼館で身柄を引き取ったエリナを働かせることになる。



### エリナ・ヴァールーク

聖ディアウス帝国の聖騎士。真面目一徹な性格だが、共和国との戦闘に敗北し、処刑寸前のところをユカに引き取られる。自身の身代金を返済するためにユカの経営する娼館で娼婦として働くこととなる。

## 第一章 聖騎士

聖ディアウス帝国における騎士の歴史は、常に外来勢力との闘争の歴史であった。

東方のステップの遊牧騎馬民族からの侵略や、南方の異教文化圏からの侵攻に対抗するため、一騎当千の重装騎馬戦術が発展していった。

時には自国だけではなく、周辺諸国を守る盾となってきたのが、大陸に名を轟かせる聖ディアウス帝国重装騎士団の歴史である。

だからこそ、隣国である通商連邦共和国からの武力侵攻の報を受けたヴァルーク家当主エリナ・ヴァルークは、己の耳を疑った。

「恥知らずな」

と、彼女が皇帝からの使者に対して漏らしたのも、かの国が外来勢力からの侵略を受けた際、幾度となく帝国騎士団がそれを救ってきたという歴史があつたからである。

よくよく報告を聞けば、彼女の友人の一家が治めている地域が既に共和国軍の支配下にあり、貴族達の多くは収監され、女達に至っては娼婦として売り飛ばされたのだという。

神聖不可侵たる帝室へ牙を剥く者に対しては、徹底的な報復がなされなければならない。それこそが、帝国騎士にとつての不文律である。

万一の場合、都市の一つ程度は見せしめとして地図から消してみせるといふ強固な姿勢こそが、帝国の民に平和と安定をもたらしてきたのである。

翌朝。

出征の準備を整えたエリナは、森の泉で身を清めていた。

木々の間から差し込んだ陽の光が、彼女の姿を照らす。

すらりと伸びる長身に、銀色の長髪。水滴で濡れた白い肌は、寶石で飾られたかのようにきらきらと輝いている。引き締まった肢体には無駄な肉は一切ないものの、肩や二の腕、くびれた腰、尻などからは、女性らしい柔らかさを感じさせられる。

特別大きいわけではないものの、張りのある乳房は、剣を振る時などに少し邪魔だと彼女に感じさせていた。春先でまだまだ気温が低いという事もあり、その乳房の先端で硬くなっている乳首は、淡い桃色である。

その後、母親の形見である銀の鎧に身を包んだエリナは、侍女の手によって化粧を施される。

琥珀を溶かして形成したような大きな瞳。通った鼻筋。薄く色づいた唇。化粧などせずとも十二分に美しいエリナの頬と唇に紅が差され、目の縁には軽くラインが引かれた。

帝国において、女騎士は、偶像アイドルを演じなければならぬ。

特に一軍を率いる騎士団長となれば、必要とされる資質は個人の武勇や指揮力ばかりでなく、多くの人間の心を奪うような絶対的なカリスマ性こそが必要とされる。

そのためにも、美しい容貌というものは強力な武器となるのである。

銀髪を一つ結びにし、ティアラをつけてみせれば、帝国最強の女騎士団長エリナ・ヴァルークの完成となる。

「私は、私の成すべき事を成します。お母様」

鏡に映る自分自身の姿に、彼女は誇りを持っていた。

続いて、森の神殿で出征の儀式が執り行われる。

儀式のため、皇帝の一行も訪れていた。

聖ディアウス帝国三十六代皇帝、アラン・ディアウス。

普段厚いベールに覆われているその姿は、こういった限られた儀式の時にのみ、公に晒される事となる。

白い肌はきめ細かく、さながら高原に降り積もった新雪のよう。切れ長の瞳はエメラルドグリーンに輝き、香油によつて手入れされた亜麻色の髪は、腰下まで伸ばされている。

一見すると女性と見間違ふような容姿。黄金で装飾された紅いマントに身を包んだこの若き皇帝こそが、エリナが唯一絶対の忠誠を誓う相手である。

その手から指揮杖を受け取った時、戦乙女の心が熱く燃え上がった。

「活躍を期待しているよ。エリナ・ヴァルク」

御意、と返答し、自らの主君の姿を仰ぎ見るエリナ。

その琥珀色の瞳に、光が灯る。

「アルテミナ様。どうか、我が騎士団に栄光を」

共に戦場へ向かう三千の騎士達の前で、彼女は祭壇に向けて祈った。

いかに歴戦の騎士達といえども、この中の何人かは確実に生命を落とす事になるだろう。

しかし、戦場で散った勇敢な戦士達の魂は、月と狩猟を司る女神アルテミナの森で、英

霊として安息の日を迎える事となる。

そう信じるからこそ、帝国の騎士達は生命を捨てて戦う事ができるのである。

帝国のために命を落とした幾万の魂が眠る神聖な森を守護する事こそが、帝国成立以前、神話の時代から続く名門中の名門、ヴァルク家の使命である。



翌日。

「我が騎士団は甘く見られているようね」

共和国軍は占領した街に立てこもるとばかり思っていたけれども、意外や意外、我々無敵のヴァルク騎士団を相手に、真つ向からの勝負に臨むようだった。

偵察隊からの報告によると、共和国から金で雇われた傭兵隊、およそ五千が接近中との事。長時間の行軍によって疲弊した我が軍の鼻先を突くつもりだろうけれども、だとしたら随分と舐められたものだと感じる。

所詮は金で買われた軍隊。帝国騎士団の敵ではない。

広い平原において対峙した傭兵隊に対し、全軍で突撃をかけると、途端に敵は総崩れとなった。

遊牧民の軽装騎兵より速く、古代の重装歩兵より硬く、敵を粉砕するのが帝国の騎馬隊である。そのための重い装備を整え、優秀な馬を用意出来る財力と、それらを扱う事ができる技量。

これらは、一朝一夕で習得出来る事ではない。

血統と家柄によって、帝国騎士に代々受け継がれてきた伝統があつて初めて可能な事。

だからこそ、私達貴族には、そういった力を持たない平民達を守る義務があるのだ。

「突撃ッ」

声を上げ、私は、愛馬バルウを駆って敵陣へと向かつていく。

私に続いて、三千の重騎士達が突撃を敢行する。





「あっ……はっ……」

「そおれ♥ それそれそおれ♥」

壺からもうひと掬い粘液を掬い上げ、自らの身体に塗りつけるユカ。そうして、その身体を私の上半身から下半身まで、ぬるう〜と滑らせる。

「はあっ……っ」

くすぐつたいような、何か不思議な感覚に、またも声を漏らしてしまう。

「脚の方も、洗わないといけませんよね〜♪」

くるりと身体の向きを変えたユカの陰部が、私の目の前に見せつけられる。同性の性器をまじまじと見せつけられる事などは初めての経験だが、意外と、生々しいものだと感じる。

「んっ……んん〜っ♥」

「はっ……ああっ……!!」

右脚を、ぬるぬるとした身体全体で擦られる。と、脚が溶けてしまったかのような感覚……っ……はあっ……どうして、身体を粘液塗れの身体で擦られるだけで、こんなにもっ……。

「はあ〜んむっ……♥」

「え？ あっ……ひいっ……ッ」

足の指を啜えられてしまう。

くちゆくちゆと、指の一本一本を舐められ、指の間を舌で舐められると、くすぐったいような、気持ち……いいような、不思議な感覚で、ああっ、私は、ひいひいと息を漏らすしかなかった。

まるで、ペニスを愛撫するかのような舌と口腔の動きで、私はっ……嗚呼っ……舐められて、しゃぶられるのって、こんなっ……感覚なお……ッ!?

「ひいっ……なっ……そんなところ……舐っ……ッ」

「んんんんん？ んちゅっ……んちゅぬちゅううっ♡」

続けて、左足も同じように舐められてしまう。

「ひっ……んんん……ッ」

そのまま、腰の辺りを手でぬるぬるうつと撫でられる。

嗚呼、本当に、どうしたというのだろう……触れられる、触られる場所が、溶け落ちてしまいそうな感覚。

「それじゃあ、一番大事な所も洗わないとねえっ♪」

再び壺の中からひと掬い粘液を手に取ると、その粘液を私の……ああっ……。私の股へとっ……垂らされっ……。

「こうやってオマンコとオマンコを擦り合わせっ……てえっ……♡」

「っ……アっ！ あっ……ちよっ……こっ……」

左脚を抱えられ、ユカの下腹部が、私の下腹部に擦りつけられる。

先ほど私の目の前にあった膣によって、私の膣が擦られっ……あっ……駄っ……熱っ……はあっ……！

少女じみた見た目の女資本家の、二枚貝のように生々しい女性器。その、淫蜜だか愛液だかでト口けてしまっている淫口が、私の膣と合わさる度に、ぐっぢゅんぐっぢゅんと下品な音が響いてしまう。

あっはあっっ……。粘膜に粘液が擦りつけられる度、粘膜の部分が熱くなってしまい、下半身から、熱い、熱うい感覚が弾けてっ……嗚呼っ……弾けて、熱くてっ……先ほどまでとは比べ物にならないような感覚に襲われてしまう。

嗚呼、あっ、これこれこれは、これだけで、だめになってしまっっッ。

くちゅっ……ずぢゅぐぢゅっ……ぐぢゅぐぢゅっ ♡

カクカクと、私の脚を抱えて下品に腰を振るユカ。

まるで、こんなの、性交をしているよう……だ……。

「あっ……♡」

性交、という言葉が浮かんだ瞬間、なぜか頭の中で火花が弾けた。

なぜだ……か、分からないが、嗚呼っ……はっ。

ぐちゅくちゅつ……ぐちゅつ……ぐちゅうつ……♡

「あはっ♪ もうお顔トロっところになってるじゃないですかあっ♡」

そう指摘され、思わず腕で顔を隠そうとする……が、その腕が掴まれてしまう。

「駄々目っ♡ ちゃんとお顔見せてくださいよおっ♡」

そう言われ、じつくりと顔を覗かれてしまう。

あどけないような、大人びたような淫らかな瞳に、私の表情が映る。

ああ、なんて顔をしているんだ、わたしはっ。

と、

「んっ♡ んちゅっ♡ んっ♡ んちゅうううう♡」

「んっ……んんっ……っ？ んっ？ んんんっ？」

突然、接吻をされた。

それと同時に、一気に白濁する意識。

ああ、何も考えられない。

「ふふっ……♡ どうです？ もう、キマっちゃったようですねえ♡」

目の前の少女（しようじょ？）に、乳房を咥えられる。

ぢゅぱぢゅぱと音を鳴らして乳首をしゃぶられると、切ないようなもどかしいような、

それでいてきりきりと鋭い快感が身体中を満たし始める。

「ぢゅぶっ……ぢゅぶぢゅうっ……れろれろれろおっ♡」

「はあっ……そんなっ、なめないでっ……」

「なんれれすかあ〜？ エリナちゃんのおっぱい、やわらかくて、おいちいでしゅよお  
〜??」

「くうっ……ふっ……ふううっ……♡」

そのまま、もう片方の乳首もくりくりと刺激されてしまえば、私、わたし、無意識に腰  
をはねさせてしまっちやううっ……！

「んちゅうっ……れろれろれろおっ♡ エリナちゃん……おっぱいおいちい……♡ おい  
ちいでしゅよおっ♡ んちゅっ……んぢゅうっ……♡」

「はっ……あふううっ……♡」

トロけそうなアタマで、必死にはねそうになる腰を押えていると、しょうじょの小さな  
手が私の股へと滑りこんできてしまい、

「あっ、そこっ、ダメっ……だめだめあめえっ！」

そのまま、膣を、その粘液塗れの小さな指で擦られてしまう。

「あっ♡ はっ♡ らっ♡ はふうっ……っ」

淫蜜のぬめりか、はたまた私の身体の奥から溢れる蜜によるものか、くぢゅぐぢゅに蕩  
けた膣口を、陰核を、ぐぢゅりぐぢゅりとコスられていると、灼かれたような熱い感覚が



そう思っていたら、少しばかり表情を引きつらせたユカから「やりすぎよ」と警告を受けた。

「そういう、ものか」

残った四人の男達は表情を引き締めると、全員でまとめて私の方へ向かってきた。

囲まれる形になった私は、拳や蹴りを避けつつ、男達の隙を突いて攻撃をしていく。

「ッ……!!」

更に、一人の顎を横から殴りつけてダウンさせたところで、私は、自分自身の身体に異変が起きている事に気づいた。

どうにも、身体の奥がかあつと熱くなって、ふらふらとしてしまう。頭の中に薄霧がかかり、足元がよろめく。どくんどくと、心臓が早鐘を打ち始める。呼吸が荒くなっている、全身から、汗がにじみ始める。

鍛錬不足による体力の低下や、直前に口にした葡萄酒による酔いもあるだろうが、この感覚は――。

「はっ……くっ……はあっ……」

残る三人を相手に戦闘を続けているが、どうにも、はあはあと息が上がって仕方がない。

早く、早く勝負を決めなければいけない。

そう思い、男の腹部に拳を叩き込んでみるも、硬い腹筋によって阻まれてしまった。



しまった——。

「ッ——」

一度隙を見せてしまったが最後、私は、逆に腹部に男の全力の拳を叩き込まれる事になつてしまった。

「えげえつ……ッ」

嘔吐しそうになるのを耐えるも、私は、地面へと押し倒されてしまった。

「おおうっと、騎士様ダウンっ♪」

楽しそうに、煽るように実況をするユカ。

そんなユカに、私は叫ぶ。

「ユカ・ユーリカっ……。私をハメたなッ」

「ああら、何の事かしら？ ハメハメえ？」

私の身体を蝕むこの熱い感覚。

頭の中がトロりと蕩け、全身が溶け落ちていくような感覚。肌は風を切るだけで敏感に反応してしまい、身体の奥が、きゅんきゅんと刺激を求めてうずき始める。

これは、淫蜜による媚薬と陶酔の効果に違いない。試合前に手渡された葡萄酒に混ぜられていたのだろう。うかうかとそれを口にしてしまった私も不覚ではあったが、それにしても、こんな事……ぐうっ……。

私が地面に押し倒されたのと同時に、わあーっと、一気に客席が沸き始める。

その様子を見て、私は、全てを悟った。

(初めから、これは闘技会ではなかったのだ……)

「残念だけど、貴女をハメハメするのは私の役目じゃないの」

屈強な男の手によって、両腕を地面に押さえつけられる。

こうなってしまうのは、完全に男女の力の差が歴然となってしまう。バンザイのような形で腕を固定されたまま、嗚呼、とても、振りほどく事など出来ないっ……。

「放せっ……触るなっ……」

男達の手が、私の鎧にかかる。

母上の鎧を汚い手で触れられた事に激昂しつつも、抵抗が出来ない事がもどかしい。

男達は、力任せに私の胸当てを引き剥がした。

パチィと、何かが弾ける音。

そのまま、鎧の下のインナーも破かれ、胸元が露わになってしまう。

うおおと沸く客席。

げへへと、下品な表情を浮かべた男の手によって、乳房が揉みしだかれてしまう。ぐにゅぐにゅと、こねくり回されるように乳房を揉まれ、膨らんだ乳首をクリクリと弄られる。最近の生活によってサイズの増した乳房が、男の手にあわせて形を変えていく。その度に、

私の身体の中でじんじんと熱いものが溜まっていき、乳首を弄られると、キーンと鋭い快感が弾けてしまう。

身体の奥から湧き上がる感覚をなんとか我慢しようとするのだが、葡萄酒に盛られた淫蜜の効果もあって、私は、

「あっ……はあっ……んはっ……」

意思に反して、甘い声を上げてしまう。

「どうしたんでしょう？ 騎士サマ、甘い声が上がっていますねえ〜♪」

その様をユカにじろじろと見られ、実況されてしまう。やめろっ……。やめてくれっ……。少しでも抵抗をしようと、脚をばたつかせていると、その脚をしつかりと掴まれてしまった。

更に、股の辺りのインナーをびりびりと破かれっ……。嗚呼、もうっ……。

「あぁ〜っ！ 騎士サマのオマンコがご開帳してしまいましたぁ〜っ！ あはっ♥ かし、こういう事なのでしょう？ どうにも、既にオマンコ濡れ濡れのように見えますが、どうしたんでしょうね？ あはっ♥」

大勢の観客の前で秘部を露わにさせられ、顔がかあつと熱くなってしまう。

もう、殺してくれ。

殺して……。

「騎士サマのオマンコ、くばあくばあと、物欲しそうにおねだりしているようです。さあ  
っ♥ さあっ♥ これから、どうなってしまうのでしょうか」

男の一人が、下半身から勃起した肉棒を剥き出しにさせ、私の股ぐらへと突き出してき  
た。

血管が浮き出た、赤黒いペニス。

娼婦として数多くの男の相手をし、見慣れてしまったものではあるものの、こうして乱  
暴に突きつけられるという経験は今までほとんどなかったので、恐怖を感じてしまう。

ビクンビクンと脈打つペニスの亀頭の先を、膣口にあてがわれてしまう。ぐうっ……や  
めろっ……っ！ 必死に脚をばたつかせてみようとするも、熱くなってしまう淫裂に硬  
いモノを押し付けられる感覚に、私の身体は、意思に反して涎を垂らし始めてしまってい  
た。

「あっ……はあッ……！」

そのまま亀頭の先を咥え込んでしまったが最後、膣奥まで一気に肉棒を挿入されてしま  
った。っ……あッ……♥ 身体ぜんぶが貫かれてしまったかのような感覚に、私は、身体  
をのけぞらせる。

「レイプですっ♥ ああ〜っ♥ 騎士サマ犯されてしまいましたっ♥」

ずびゅっ……ずりゅっ……ずりゅずびゅうっ……♥

激しいストロークで、膣内を硬いペニスでずぶずぶとかき回されてしまう。

子宮口を激しく突かれたかと思えば、膣壁を入り口近くまで亀頭のカリ首でコスリあげられてしまう。かと思えば、一気に膣奥までペニスをねじ込まれてしまう。

「あっ……ッ！ はっ……あああっ……」

身体に盛られた淫蜜の効果も手伝い、意思に反して、頭の中が、一気に快感でハジけてしまう。

ずりゆずぶと膣壁を太い肉棒で擦られ、奥を突かれていると、甘い声が口から漏れてしまうのだから、もう、ああっ……っ。

私のからだは、ばかになってしまったのか……？

「おっ……♡ ほっ……♡ はっ……ぐうっ……」

「これはこれは、騎士サマの口から、甘い甘い喘ぎ声が漏れておりますっ♡ ああん♡  
なんてえっちなんでしょ♡」

ずびゅっ……ぶびゅううっ……♡

私の下半身から、下品な水音が響く。

屈強な男に組み敷かれ、大勢の観客の前で、好き勝手に腰を打ち付けられ、膣穴を犯されている。恥ずかしくて、悔しくて、たまらないけれども、それでもっ……ッ。

「あっ……♡ はあっ……ッ。ああっ……♡」

腰を打ち付けられ、身体を揺さぶられる度に、だらしない乳房がたゆんだゆんと揺れる。

「んっ……んぐうっ……」

口の中に、別の男の肉棒が挿入される。

何日も洗っていないのだろかという、汗混じりの性臭が鼻の中に流れ込んできて、私の脳内を染める。生のイカの臭いにチーズを混ぜた臭いを抽出して嗅がされるようだ。

まるで自慰行為の道具として使われるように、男は私の銀色の髪を、頭を掴んで、激しく喉奥をペニスで突いた。

ガンガンと頭を振らされると、のうみそのなかが激しく揺さぶられ、それだけで意識がトビそうになってしまう。更に、アツくてカタいチンポによって舌を、頬を、喉を犯されてしまつて、呼吸も、ままならなくなつてしまう。

ああっ、ぐっぼぐっぼと、喉がペニスシゴきの道具として使われてしまうウっ……ッ！

「ぐひっ……ごぼっ……ぎひいっ……」

あまりの苦しさに、私は半ば白目を剥いてしまう。

意識が白濁していき、ふわふわとした感覚に、身体全体が包まれていく。がくがくと腰がはね、脚が震える。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**



ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌!

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌!

正義感に燃える少女達をたっぷり陵辱! ヒロインのピンチ満載!!

【偶数月】  
隔月発売  
2-4-6-8-10-12月

【奇数月】  
隔月発売  
1-3-5-7-9-11月

【電子版】  
毎月配信  
書籍版は奇数月  
発売!



ニ次元  
**ドリーム  
マガジン**  
3D DREAM MAGAZINE

コミック **UNREAL**  
オムニバス  
リアルファイル

正義の  
ヒロイン  
**姦獄  
ファイル**  
Volume 2  
増えたいヒロイン  
羞恥戸惑う表情たまらない

あなたのキモチイをお手伝い!キルタイムのアダルトコミック誌

全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中!

電子書籍版も  
好評発売中!

